

平成 30 年 1 月 22 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201780090

氏 名 五十嵐 淳
(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

- 派遣先：都市名 ワシントン DC (国名 米)
- 研究課題名 (和文) : イマヌエル・カントの論理学体系の歴史的意義の研究
- 派遣期間：平成 29 年 9 月 18 日 ~ 平成 29 年 12 月 22 日 (95 日間)
- 受入機関名・部局名：ジョージタウン大学・哲学科
- 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先においては、18 世紀の哲学者イマヌエル・カントの論理学思想と、その歴史的意義について研究を行なった。一般に、カントの論理学思想は歴史的に見てあまり重視されてきたとは言い難い。しかしながら、その内実に向けるならば、数々の先進的な洞察が見いだされ、それらは今日の観点から見てもなお興味深いものとなっている。このようなカントの論理学思想の先進性に着目し、独創的な研究を行なっている Huaping Lu-Adler 教授である。本研究は、Lu-Adler 教授のもとで、カントの論理学思想についての包括的な研究を行ない、特にその歴史的な意義について新たな知見を与えることを目的としている。より具体的には、カントの論理学思想を形式的に扱いうるような枠組みを与え、これにもとづいて種々の論理的概念を分析するとともに、それらの相互関係を明らかにした。

現在の研究状況としては、渡航前から構想されていた研究内容に対して、具体的な文献学的裏付けを与えることができた。さらに、英米圏のカント研究の状況を適切に把握することで、国際的な業績として発表しうるに十分なだけの内実を与えることができたと考えられる。以上の点で、今回の派遣においては、当初の計画通り研究を大きく進展させることができた。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

今回の派遣によって得られた研究結果については、2018 年度中に 2-3 本ほどの論文として、国際ジャーナルに投稿する予定である。具体的には、論理学史およびカント研究に専門誌への投稿を計画している。また、以上の研究成果は渡航中に博士論文としてすでにまとめられている。博士論文については次年度に提出が計画されており、また博士号取得後には書籍としても出版を目指す。

今後の研究計画としては、今回得られた研究成果をより発展させ、19 世紀のポスト・カント思想の研究へと繋げていくつもりである。ボルツァーノ、ロツェ、ブレンターノといった 19 世紀の哲学者・論理学者の思想は、カントの場合と同様にその先駆性が注目を集めているが、これらの思想はすべてカントの思想の継承および批判を通じて形成されたものである。したがって、本研究の成果を踏まえることで、こうした研究に対しても貢献することが可能であると考えられる。

また、今回の研究では、カントの論理学を分析するために形式的なモデルを構築したが、このときに得られた枠組みは、近年「知識表現」(knowledge representation)と呼ばれる情報科学の分野で用いられたものを拡張したものである。この意味で、本研究によって得られたカントの論理学思想の洞察は、哲学・論理学の分野のみならず、情報科学という実践的な分野においても応用が可能なものとなっている。今後はこのような観点から、カントという歴史的な哲学者の思想の現代的な意義を明らかにすることを目指していく。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラム採用によって得られたことは、大きくわけて以下の三つにまとめることができる。

1. 国際誌への掲載するための指導

我が国の哲学分野においては、残念ながら国際誌へ掲載は多いとは言えない。この要因の一つとなっているのは、論文の質に加えて、査読に通すための戦略的な観点が要求されるという点である。今回の滞在では、長期間に渡って指導いただくことにより、国際誌への掲載に必要とされる基準・戦略についてかなりの程度把握することができた。

2. 国際的な研究状況の把握

上述した点と関連して、研究を世界に発信していくためには、現在の研究状況の適切な把握が必要となる。この点についても、最先端の研究者との議論を通じて国内で得ることが難しい多くの情報を得ることができた。

3. 国際的な人脈形成

今回の滞在では、受け入れ教員となっていた Lu-Adler 教授をはじめ、多くの研究者と交流を持つことができた。今回知己となった研究者の方々とは、今後の研究においてより深い交流を行ない、わが国の哲学研究の発展に貢献したいと考えている。